

すべての国よ、主を賛美せよ Lobet den Herrn, alle Heiden: BWV230

解説と対訳・樋口隆一（リリンク指揮・バッハ/モテト全集 [COCO-7479~80] 添付解説より）

1821年にライプツィヒのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社より出版された初版には「オリジナル手稿譜による」という但し書きがあるが、こんにちそうしたものは残っていない。したがって成立年代、目的等不明であるが、歌詞の内容から少なくとも葬儀用ではなく、祝賀的な目的に用いられた可能性が強い。失われたカンタータの一部だったとも考えられよう。

4声のモテトは、詩編117のルターによるドイツ語訳を歌詞としている。「すべての国よ、主を賛美せよ」と歌い始める第1部と、4分の3拍子の「アレルヤ」によるフーガからなる。これはまさに声楽による<前奏曲とフーガ>にほかならない。

Psalm 117.1-2

Lobet den Herrn, alle Heiden,
und preiset ihn, alle Völker!
Denn seine Gnade und Wahrheit
waltet über uns in Ewigkeit.
Alleluja.

詩編 - 第117章第1・2節

すべての国よ、主を賛美せよ。
すべての民よ、主をほめたたえよ。
主の慈しみとまことはとこしえに
私たちを超えて力強い。
ハレルヤ。

解説・萩野

・ 出典は失念しましたが、新バッハ全集でJ.S.バッハの真作とされたBWV225~230の6つのモテトの中で、このBWV230は最後まで偽作の疑いが残ったそうで、その理由の1つがLobet den Herrn, alle Heidenの部分の、フレーズに合致しない歌詞の割り付けです。

* 一般的に演奏には斜体で記した方の歌詞が用いられますが、Bärenreiterの譜面では斜体文字は編集者が記したものの、という原則があります。

Lobet den Herrn, alle Heiden

・ lobetの語尾音節の最後の音符が8分音符の場合、語尾のtと次の語頭のdとはリエゾンせざるを得ないでしょう。この主題は各音をテヌート気味に歌います。



・ ドイツ語聖書では最初の一文は上記の通りLobet den Herrn, alle Heidenで、これをalle, alleと2回繰り返すようにしたのは、多分バッハが作編曲過程で考えて行なったことです。大学の合唱団で、東京のハインリッヒ・シュッツ合唱団の淡野弓子先生の客演指揮でシュッツのモテトを数曲歌う機会があり、その中の1曲が"Also hat Gott die Welt geliebt"（浜松バッハ研では1995年上演）なのですが、その曲の中にあるalleの反復は、全ての中の1つ1つ（英語的にはeach）の意味があるとのことでした。この曲でも同様に考えて良いと思います。

alleの発音は、al-に割り当てられた最後の音符では母音を長く伸ばさず、早めにlの発音に移行します。またalle, alleの間のカンマでは、わずかに区切る程度にして息継ぎは禁止とした方が、順次上昇旋律の自然な流れを妨げません。

und preiset ihn, alle Völker

・ 動詞lobenとpreisenはどちらも「誉める、称える、賛美する」などと訳し、そのニュアンスの違いはよく知りませんが、Preisという名詞が「価値、価格、賞」の意味であることから、preisenは「価値を認めて称える」というような意味があるのではないのでしょうか。

・ ここではそのpreisetという単語が最も大事ですので、undの語尾の-dは例え省略してでも、prの巻舌に時間をかけるべく、充分前のタイミングから発音を始めます。

・lobet den同様、preisetの語尾音節の最後の音符が8分音符の場合、語尾の-tと次のihnとはリエゾンせざるを得ないでしょう。

・特にここには4分音符1個と8分音符2個からなる「喜び」の象徴音形が多数出て来ます。リズム的な曲ではターンツタツ（この「ツ」の間[ま]を意識することが大事）というつもりの歌い方をすると効果的です。このリズムを活かすには、preisetの-ei-に割り当てられた最後の音符では、「ア」で伸ばさず早めに「イ」に移行して音量を減衰させると良いでしょう。則ち、この主題は動的な要素が増しているの、ある種の軽さを持たせる必要があります。



・第43小節からLobet den Herrn, alle Heidenの主題とund preiset ihn, alle Völkerの主題が同時に出現するようになりますが、ここで2つの主題の歌い方の違いが意味を持つこととなります。この時代の多旋律音楽では、主題は早く出現したものの方が重要度が高いのですが、Lobet...の主題をテヌートに、und preiset...の主題を軽く歌うことにより、前者が後者に埋もれにくくなります。

Denn seine Gnade und Wahrheit waltet über uns in Ewigkeit

・リズム的な雰囲気支配する全体の中で、この第58小節第2拍裏～第77小節第1拍は唯一表情的にやや和んだ感じとなります。歌い方はレガート主体。テンポをかなり遅くする例もありましたが、今となっては古いやり方という印象を持ちます。

・第77小節第2拍から始まるEwigkeitのE-に割り付けられた長い音符は、言葉の意味である永遠を象徴しています。そしてここからは再び活気が戻ったリズム的な演奏となる例が多いです。

Alleluja (元はヘブライ語で「主を賛美せよ」という意味)

・ここからは主題も含めて、パート別にずれて現われるヘミオラの絡みがおもしろい部分です。

・第146小節からのソプラノの旋律は、第99小節から始まる主題の転回形によるゼクヴェンツ（同じパターンの繰り返し）です。

[主題]



[主題の転回形]



また同じところから始まるバスには、ヘミオラが3回連続で現われます（実際にはもう2小節前から始まっています）。



第156小節からは主題の転回形によるゼクヴェンツはテノールに、連続ヘミオラはアルトに（歌詞の割り振りが少し替えられて）、それぞれ現われます。したがって第156小節からはソプラノはテノールの旋律を主役として活かすべく、できる所では音の長さを短かめにするなどして、音量感を減らす工夫をすべきです。

//2003.10.15